

李白における河北・河東地方の意義

——実像と伝承との一体化をめぐつて——

寺尾 剛

目次

- 一、序論
- 二、李白の河北・河東地方関係の作品について
- 三、邯鄲と恒山ゝ作品の流布と伝承の形成について
- 四、太原ゝ「太原早秋」・晋祠・李郭互救伝承を中心に
- 五、幽燕の地ゝ易水・黄金台・独楽寺伝承を中心に
- 六、河北・河東の地と李白樂府体詩
- 七、結語

一、序論

李白が黄河を北に渡り、いわゆる河北・河東の地（現在の河北省・山西省一帯にはほぼ相当する。戦国時代で言えば燕趙

の地」に足を踏み入れた回数はそれほど多くない。またその滞在期間も比較的短い。安旗主編『李白全集編年注釈』⁽¹⁾によれば、①開元二十三年（七三五）年（三十五歳）五月に北上、翌二十四年まで一年余り太原に遊ぶ、②天宝三（七四四）載冬、安陵に遊び、同時に博平・饒陽も巡り、年内に濟州（山東省）に至る、③天宝十（七五一）載暮秋、開封（河南省）より出發し、二年後の天宝十二載春までの間に魏郡・清漳・広平・邯鄲・臨洺・幽州を巡る、という三回、期間としては凡そ三年間である（『詹鍈・李白詩文繫年』⁽²⁾には②はないが、①③についてはほぼ同じ）。総じて言えば、李白にとつては縁の薄い疎遠な地とすることができよう。しかし、そのような土地柄であるにもかかわらず、李白とこの地との關係を詳細に見ていくと、その作品・事績・伝説伝承いづれについても、李白（その虚像をも含めて）という詩人を語る上で必要不可欠の要素が数多く見出されるのに気付くのである。詳細は後述するが、今とりあえず、それらの特記事項を列挙してみると、次のようになる。

- (1) 現地において制作されたと考えられる作品の中に、李白の五律の代表作の一つ「太原早秋」、彼の得意とする懷古詩の一つ「自広平乗醉走馬六十里至邯鄲登城樓覽古書懷」などの作品がある。
- (2) 制作地は特定できないものの、樂府体の作品の中に河北・河東を舞台とした作品が多く、とりわけ「北風行」「北上行」などは北方の雰圍氣をみごとに描き出した傑作として後世の評価も高い。
- (3) 李白詩中には「太行（山）」「易水」「汾水」「白登」「銅雀台」「聊城」「邯鄲叢台」「雁門関」など、唐詩人たちによつてしばしば歌われる「詩跡」が数多く見出される。
- (4) とりわけ李白がしばしば詩に詠み込む「黄金台」については、宋代からその存在の有無、呼称の前例についての議論が絶えず行なわれている。
- (5) また「晋祠」については、李白の「憶旧遊寄譙郡元參軍」の詩句が後世の「晋祠」イメージを決定的にしたとの定

評がある。

(6) 「経乱離後天恩流夜郎憶旧遊書懷贈江夏章太守良宰」などに見える発言から、李白が安祿山の叛意を事前に察知していたという見解が近年多く見られる。

(7) 李白が太原にいた時、当時無名の郭子儀（安史の乱時の英雄）を罪から救い、のち郭子儀は李白が永王水軍に参加したかどで誅されようとした際、皇帝に罪を免じるよう乞い、恩に報いたという、いわゆる「李郭互救」の故事は、唐代以来、語り継がれている（史実でないことは今日では通説）。

(8) 蜀県にある古刹・独楽寺にある「観音之閣」（現在、「閣」字の下に小さく「太白」の文字が刻まれている）が、李白の筆になるものであるという伝承が存在する（おそらく清代には確立していた伝承）。

(9) 李白が北岳恒山を訪れた際（そのような確証はない）、古刹・懸空寺の下に「壯觀」の二字を刻んだという伝承があり、後人がそれを記念して、そこに「太白祠」を建設した（解放前に壊されたという）。

一応、(1)が現地での実作、(2)が現地とは確定できずとも河北・河東が舞台となっている作品、(3)(4)(5)が素材レベルでの李白の用例、(6)(7)が李白の河北・河東における事績。但し(7)は李白の作品とは直接には関係なく、また、古く唐代から始まる伝承とはいえ信憑性も疑われている。(8)(9)も李白の作品とは関係なく、根拠に薄い俗説に属する事績——というように李白の実像に近いものから遠いものへと順に並べておいた。

しかし、このように李白の燕趙にまつわる事項を列挙してみると、その滞在期間の短さ、あるいは面積のわりに全作品に占める作品数の少なさ（特に現地での作例と確定できるものは非常に少ない。後述）に反して、この地に関して取り上げるべき話題・問題点の多さに改めて驚かされる。しかも、それと同時に注目せざるをえない点は、まさに李白的とも言うべき現象がこの地においても展開されているという点である。即ち、李白という詩人はその実像と虚像とが分離不可

能なほど複雑に絡み合っており、李白本人の営為と後世の伝承・伝説が渾然一体となつて、今日の李白像が形成されているという事実が、この河北・河東の地においても確認し得るのである。むろん、このような現象をマイナスの方向に採れば、李白の実像の再現（とりわけ伝記考証）を阻む煩わしいものであるが、プラスの方向に採るならば、むしろ中国文化の心理的・精神的な指向性、換言すれば、この文化が李白を通して何を見、何を語ろうとしているのか、といった問題を考える手掛かりとなるように思われるのである。さらに言えば、李白自身、私的・個別的なことを詩にすることを比較的好まず、作品をより客体化・普遍化・古典化することに情熱を注ぐタイプの詩人であり、また、伝説伝承についても、自らの酔態を大げさに矜持したり、洛陽天津橋畔に自らの酒楼を建築させようとしたり、あるいは黃鶴樓を叩き壊し、鸚鵡洲を転覆するなどと豪語するなど、かなり意図的に自らを伝説化しようとしていた節もある。自らの実像を韜晦し、伝説伝承と一体化したところに自らの像を造り上げることが李白の真意であつたとすれば、後世の動向は、まさに李白自身の期待どおりに展開されたと言つてもよいであらう。

しかも、以上のような李白的な現象は、往々にして土地と密接に関係している。李白の訪れ、歌う地が「詩跡」として注目され、後の多くの文人・読書人あるいは一般庶民らによつて継承され、そこから彼にまつわる伝説伝承が生まれていく、といった過程は全国各地に見られている（場合によっては「夜郎」や「恒山」のように、訪れていないはずの地でさえ伝説伝承が生まれることもある）。河北・河東地方と李白の関わりは、そういった、いわば「土地との関係に見られる李白現象」の雛型として、きわめて興味深い問題を孕んでいるように思われるのである。

二、李白の河北・河東地方関係の作品について

本節では、まず基礎的な作業として、李白が河北・河東の地（本稿では便宜上、黄河がオルドスを過ぎてし字状に流れ

る、その内側〔東北部分〕すべて、現在の河北省・山西省・北京市・天津市、及びその北の一部、即ち唐代の河北道南部・河東道一帯を指すものとする。〕について言及している用例を概観してみることにはしたい。

次に挙げる〈表〉は、現存する李白詩の、詩題及び詩中に河北・河東関係の地名が登場する作品の一覧である。原則として二字以上で地名となっているものを挙げ、地名が単独で現われているもの（例えば「幽」「燕」「趙」「代」など）は用例数が多く、また地域的にも漠然としすぎているので割愛した（ただし「燕趙」「燕南」「河北」といった用例は挙げておいた）。また「燕鴻」「代馬」「趙王」など、指示物が地名とは言い難いものも原則として削っている。体例については拙稿「李白における武漢の意義」P.75を参照のこと。制作年代については、安旗主編『李白全集編年注釈』に従っているが、一応の目安といった程度で参照して欲しい（特に楽府作品の多くは、実態として、制作年代の確定はほとんど不可能に近い）。

この表に従って、李白の詩（及び詩題）に現われた地名の用例数を整理してみると、ほぼ次のようになる（一作品中に重複して現われた場合、一首に数える）。

燕趙（七首。燕・趙地方の総称。現在の河北省北部から山西省西部一帯。用例としてはすでに『史記』に見える。詩では「古詩十九首（東城高且長）」の「燕趙多佳人、美者顏如玉」という例が古い。この句のイメージによって「燕趙」の語は美女あるいは歌妓舞妓を連想させる語ともなっている）

幽燕（三首。唐の幽州、春秋戦国の燕国。河北省北部から遼寧省西部にかけての一帯）

燕地（一首。春秋戦国の燕国以来の燕の地）

燕国（一首。春秋戦国の燕国）

〈表〉 李白河北・河東地方關係詩歌作品

作品番号	作 品 名	製作地	種別	地名（詩題、詩序、詩中）	制作年代
027	古風 其二十七	?	古風	燕趙	728
114	結襪子	?	樂府	燕南	731
182	少年行 其一	?	〃	易水、并州	〃
131	白馬篇	?	〃	太行	〃
015	古風 其十五	?	古風	黄金台	〃
072	行路難 其一	?	樂府	太行	〃
073	行路難 其二	?	〃	黄金台	〃
063	梁甫吟	?	〃	朝歌、棘津	〃
115	結客少年場行	?	〃	易水	732
160	秦女休行	?	〃	燕国	〃
735	太原早秋	太原	行役	太原、汾水	735
322	贈郭季鷹	?	贈	河東	〃
349	遊溧陽北湖亭望屋瓦山懷古 贈同旅	溧陽	〃	太行	739
603	五月東魯行答汶上翁	魯郡	酬答	聊城	740
524	魯郡堯祠送張十四遊河北	〃	送	河北、北燕、易水	741
090	閔山月	?	樂府	白登道	743
195	秋思	?	〃	白登台	〃
098	鞠歌行	?	〃	朝歌	〃
893	觀博平王志安少府山水粉圖	博平	詠物	博平（二例）	744
335	訪道安陵遇蓋寰為予造真籙 臨別留贈	安陵	贈	安陵（二例）	〃
319	贈饒陽張司戶燧	饒陽	〃	饒陽	〃
474	留別西河劉少府	東魯	別	西河	745
515	魯郡堯祠送竇明府薄華還西 京	〃	送	銅雀台	746
163	邯鄲才人嫁為廝養卒婦	?	樂府	邯鄲（二例）、叢台	〃
607	酬張司馬贈墨	?	酬答	上党	747
443	寄上吳王 其三	?	寄	広平、黄金台	748
066	戰城南	?	樂府	桑乾	749

006	古風 其六	？	古風	雁門関	〃
035	古風 其三十五	？	〃	寿陵、邯鄲	750
427	憶旧遊寄譙郡元參軍	東魯	寄	并州、太行、羊腸、北京、晋祠	751
426	寄王屋山人孟大融	〃	〃	王屋	〃
423	聞丹丘子于城北山宮石門幽居中有高鳳遺跡…	〃	〃	雁門関	〃
469	留別于十一兄逖裴十三遊塞垣	開封？	別	趙、易水	〃
169	發白馬	？	樂府	武安、易水、滹沱	〃
171	枯魚過河泣	？	〃	柏人	〃
473	魏郡別蘇明府因北遊	魏郡	別	魏郡、魏都、燕趙、淇水	752
320	贈清漳明府侄聿	清漳	贈	清漳（二例）、趙（女）、趙北、燕南	〃
762	自広平乘醉走馬六十里至邯鄲登城樓覽古書懷	邯鄲	懷古	広平、邯鄲（二例）、石子岡、趙、易水、叢台、燕京	〃
653	邯鄲南亭觀妓	〃	遊宴	邯鄲（二例）、南亭、燕趙	〃
703	登邯鄲洪波台置酒觀發兵	〃	登覽	邯鄲、洪波台（二例）、燕趙	〃
321	贈臨洛県令皓弟	臨洛	贈	臨洛県	〃
164	出自薊北門行	？	樂府	薊北門	〃
126	幽州胡馬客行	？	〃	幽州（二例）	〃
547	送崔度還呉度故人礼部員外 国輔之子	幽燕	送	幽燕	〃
1079	鄒衍谷	幽州	一	鄒衍谷、燕谷	〃
088	北風行	？	樂府	燕山、軒轅台、幽州、長城	〃
061	公無渡河	？	〃	龍門	〃
952	代贈遠	？	閨情	幽燕、易水	〃
954	閨情	？	〃	漁陽	〃
306	贈韋侍御黃裳 其二	？	贈	太行	753
623	江上答崔宣城	宣城	酬答	燕台	〃
392	贈宣城宇文太守兼呈崔侍御	〃	贈	朝歌、北燕	〃

502	送王屋山人魏万還王屋	揚州	送	王屋（二例）、聊拱城	754
286	山鷓鴣詞	秋浦	歌吟	燕山、雁門	〃
393	贈宣城趙太守悅	宣城	贈	幽都	755
166	北上行	？	樂府	太行、幽州	756
739	奔亡道中 其四	？	行役	易水、燕山	〃
191	猛虎行	溧陽	樂府	燕地、幽薊城	〃
399	贈友人 其二	？	贈	易水	〃
373	贈常侍御	？	〃	武安、長平、燕趙	〃
478	感時留別從兄徐王延年從弟 延陵	杭州	別	清漳	〃
360	在水軍宴贈幕府諸侍御	？	贈	黃金台、幽燕	757
876	南奔書懷	？	寫懷	黃金台	〃
168	空城燕	？	樂府	太行	〃
369	繫尋陽上崔相渙 其一	尋陽	贈	邯鄲、長平	〃
375	經亂離後天恩流夜郎憶旧遊 書懷贈江夏韋太守良宰	江夏	〃	幽州、黃金台、貴鄉、昌樂	759
489	將遊衡岳過漢陽双松亭留別 族弟浮屠談皓	漢陽	別	邯鄲宮	〃
582	洞庭醉後送絳州呂使君流澧 州	巴陵	送	絳州	〃
124	鳴雁行	？	樂府	燕山	〃
379	博平鄭太守自廬山千里相尋 入江夏見訪…贈別	江夏	贈	博平、邯鄲	760
494	聞李太尉大舉秦兵百万出征 東南…	金陵	別	燕趙	762
412	獻從叔当塗宰陽冰	当塗	贈	燕趙	〃
174	千里思	？	樂府	五原閼	？
1100	寒女吟	？	一	邯鄲	？
663	同族姪評事黯遊昌禪師山池 其一	？	遊宴	清涼山	？
849	擬古 其七	？	感遇	太行	？



〈図〉河東・河北地方略図

幽州（四首。古代の九州の一つ。あるいは漢代以降の州名。唐代の州治は薊県〔現在の薊県ではない〕）

幽都（二首。幽州を指す）

燕京（二首。春秋戦国の燕国の都・薊城。現在の北京市一帯〔現在未確定〕）

幽薊城（二首。李白は幽州・薊州の多くの城の意で用いる）

漁陽（二首。天宝年間の漁陽郡、つまり薊州のこと）

薊北門（二首。楽府題「出自薊北門行」に見える地名。燕の都の北門の意か）

燕南（二首。春秋戦国の燕国南部。ほぼ現在の北京市から南の保定市にかけての二首）

北燕（二首。現在の北京市一帯）

河北（二首。唐代の河北道、現在の河北省・北京市・天津市一帯）

燕山（四首。今の河北省北部、北京市北境、天津市薊県東南に連なる燕山山脈。あるいは燕地方、北地の山々を漠然と指す。李白の場合、「燕支山」「燕然山」の略と見る必要はないと思われる）

軒轅台（二首。軒轅とは黄帝のこと。黄帝が涿鹿の野で蚩尤と戦った際の記念碑的建築物。現在の河北省懷来県喬山の

上がその古址とされる)

鄒衍谷(一首。鄒衍が燕国に滞在した際、黍を育てたと伝えられる谷。現在の北京市密雲県西南にある。別名、燕谷山・

黍谷山・寒谷山)

燕谷(一首。鄒衍谷のこと)

桑乾(一首。桑乾河のこと。河東・河北の北部を流れる、北方を代表する河川。賈島の「渡桑乾」などで知られる)

易水(九首。唐代の易州〔州治は易県〕を西から東へ流れる河。戦国・燕の昭王の建設した下都〔陪都の意〕の武陽〔北魏の故安、唐の易県〕は、その北に位置する。易水・武陽と言えは、燕の太子丹と刺客・荆軻との離別の地として有名。李白の場合も荆軻の「風蕭蕭兮易水寒、壮士一去兮不復還」の歌が意識されていることが多い。駱賓王の「易水送別」をはじめとして唐代の代表的「詩跡」)

黄金台(六首。燕の昭王が郭隗の言を入れ、黄金を置き賢者を招いたと言われる台。所在地については諸説ある。例えば、①燕国の首都・薊〔現在の北京市永定門東南〕という説、②易水付近、特に下都武陽の近辺という説〔この②説の中にも諸説ある〕などがある。唐詩人においては、『文選』李善注の引く王隱『晋書』の言う「故安県」、及び「上谷郡固経」の言う「易水東南十八里」の記述が影響力を持った(つまり②説)と考えられるが、李白詩については要検討。いずれにせよ陳子昂・李白以後、この「黄金台」の名称は唐詩に頻出するようになる。詳細は後述)

燕台(一首。黄金台のこと)

淳沱(一首。河北道のほぼ中央部を西から東へ流れる河北を代表する河川。水源は河東道五台山、太行山脈を貫き河北平原に入り、最後には漳水となって渤海に注ぐ。李白は「発白馬」において「鉄騎若雪山、飲流涸淳沱」と、辺塞詩のイメージとして用いる)

饒陽(一首。唐代の河北道深州〔饒陽郡〕治所)

安陵（一首。唐代の河北道德州〔平原郡〕に属する）

聊城（一首。戦国時代、魯仲連が一箭の書によって下した燕の城。唐代の河北道博州〔博平郡〕に属する。現在は山東省に属する。なお魯仲連は李白の最も敬愛する人物の一人）

聊攝城（一首。聊城と攝城。攝城も河北道博州に属し、唐代の聊城の東約二〇キロに位置する）

博平（二首。唐代の河北道博州〔博平郡〕に属する。現在は山東省に属する）

魏郡（一首。唐代の河北道魏州〔魏郡〕治所）

魏都（一首。魏郡に同じ。戦国・魏の武侯の別都であったため「都」と称する。李白は「魏郡別蘇少府因北遊」において「魏都接燕趙、美女誇芙蓉。淇水流碧玉、舟車日奔衝。青樓夾兩岸、万室喧歌鐘。天下称豪貴、遊此每相逢。…」と、その華やかさを強調する）

貴郷（一首。魏郡の別称。魏郡郡治所在地）

淇水（一首。魏郡を流れる河川）

昌楽（一首。唐代の河北道魏州〔魏郡〕に属する。現在では河南省に属する）

朝歌（三首。唐代の河北道衛州〔汲郡〕に属する。殷の都。李白の場合、二首は、太公望・呂尚が文王に会う以前、朝歌において牛の屠殺業を行なっていたという故事に用い、一首は墨子が朝歌に入ろうとしなかったという故事に用いている。現在の河南省淇県）

棘津（一首。唐代の河北道衛州に属する。呂尚が朝歌において屠殺した牛を売っていたという黄河の渡し場。現在の河南省滑県西南古黄河の上という）

銅雀台（一首。曹操の建設した鄴城中の楼台の一つ。呉の二喬をここに蓄えようとしたという伝承は有名。唐代の河北道相州〔鄴郡〕臨漳県。現在の河北省臨漳県西南の古鄴城遺跡の西北隅にある）

広平（二首）。唐代の河北道洺州〔広平郡〕。「寄上吳王、其三」では、当地で善政を敷いた晋の広平太守鄭袤ていぼうの故事を用いている）

臨洺県（一首）。唐代の河北道洺州〔広平郡〕に属する）

清漳（一首）。唐代の河北道洺州〔広平郡〕に属する）

武安（二首）。唐代の河北道洺州〔広平郡〕に属する。「発白馬」に「武安有震瓦」とあり、これは戦国時代、秦軍が趙に押し寄せた際、その喚声が武安の家々の瓦を振動させたという故事に基づく。ただし、今一例の「贈常侍御」に見える「武安将」とは秦の武安君・白起のことと考えるのがよく、だとすれば当地とは関係ない）

柏人（一首）。秦漢の柏人県。唐代の河北道邢州〔巨鹿郡〕柏仁県のこと。漢の高祖がここで趙の貫高らに暗殺されそうになったが、胸騒ぎがして「柏人」が「迫人」に通じると感じ、宿泊せずに出立したため難を逃れたという故事で知られる地名）

趙北（一首）。戦国の趙国の北部。邯鄲・広平一帯）

邯鄲（九首）。うち「邯鄲宮」一首。唐代の河北道洺州〔広平郡〕に属する。広平より西約三〇キロ。春秋時代から知られ、戦国時代には趙の首都となり〔紀元前三八六年、敬侯の時〕、繁栄を極めた。東城・西城・北城の三城が「品」の字形に並ぶ趙王城、及びその東北に位置する大北城から構成される）

叢台（二首）。邯鄲大北城東北にある。『漢書』『高后紀』の顔師古注によれば「連聚非一、故名叢台。蓋本六国趙王故台也。」とあり、『中国名勝詞典』によれば、趙の武靈王が閼兵と歌舞のために造らせた台という伝承があるという。邯鄲城のランドマーク的存在。台の北には趙の著名人韓厥・程嬰・公孫杵臼・藺相如・廉頗・趙奢・李牧を祀る「七賢祠」がある）

石子岡（一首）。『太平寰宇記』卷五六「邯鄲県」に「隋『図経』云、歴陵城西十里有石子岡、：是趙簡子冢。」とあり、

『元和郡県志』巻一五「邯鄲県」に「趙簡子墓、在県西南十二里。」とある

南亭（一首。邯鄲南亭。所在地は不明）

洪波台（一首。邯鄲洪波台。『元和郡県志』巻一五「邯鄲県」に「洪波台在県西北五里。」とある）

寿陵（一首。「古風其三十五」に「寿陵失本歩、笑殺邯鄲人」とあり、いわゆる「邯鄲の歩み」「邯鄲学歩」の故事に登場する地名。燕国の邑の一つというだけで、具体的な所在地は不明）

太行（八首。河東道と河北道との境を南北に走る大連山。南部では東西に走り、河東道と都畿道との境ともなっている。

また「壮士或未達、十歩九太行」（「遊溧陽湖北亭…」）や「世路今太行、回車竟何託」（「擬古其七」）のように人生・世路の艱難や険しさにも喩えられる。ちなみにこの喩えは白居易新樂府「太行路」に受け継がれる）

羊腸（一首。羊腸坂のこと。あるいは広く太行山の隘路を言う。羊腸坂のこととすれば、河東道潞州上党県から壺関、林慮を抜け、河北道相州安陽県に至る山道のこと。曹操の「苦寒行」によっても有名）

河東（一首。黄河の東の意。唐代の河東道）

五原関（一首。『漢書』「地理志」に「代郡有五原関。」とある。唐代の河東道蔚州安辺（現在の河北省蔚県）の西南に位置する）

白登（二首。うち「白登道」一首、「白登台」一首。「白登」は河東道雲州（現在の河北省大同市）東北にある山。かつて漢の高祖劉邦がここで匈奴に囲まれたことで有名。山上に「白登台」があり、この名はすでに『水経注』にも見える）

清涼山（一首。河東道代州の南にある五台山（中国四大仏教名山の一つ）の別名。雪が多く、極めて寒いためこの名があるという）

雁門関（二首。河東道代州〔雁門郡〕の西北約二〇キロ、雁門山（別名、句注山。平均海拔一八〇〇メートル）上にあ

る関門。古代中国の最北端をイメージさせる「詩跡」。関門の中には匈奴に恐れられた趙国の辺将・李牧の祠がある。北に抜けると朔州、さらには内蒙古となる。

雁門（一首。雁門郡、雁門山、雁門関の三通りの解釈が可能）

太原（一首。古くは晋国の開国の祖・唐叔虞の封ぜられた地として知られる。秦漢時代の郡名。また并州とも言う。唐王朝創業の地。武徳元（六一八）年に并州総管、七（六二四）年に并州大都督府に改称。玄宗は開元十一（七二三）年に北都とし、并州を太原府と改称、天寶元（七四二）年に北都を北京と改称。現在の山西省太原市）

北京（一首。太原のこと。「太原」の条参照）

并州（一首。太原のこと。「太原」の条参照）

汾水（一首。太原の西を流れる河東道を代表する河川。水源は嵐州、河東道をほぼ北から南に貫流し、蒲州宝鼎県で黄河に注ぐ）

晋祠（一首。太原市の西南約二五キロ、懸瓮山下、晋水（この名が晋の国号となったと伝わる。東流して汾水に注ぐ）の源流に位置する。『水経注』には「唐叔虞祠」とある。かつては太白祠もあったという。詳細は後述）

西河（一首。河東道汾州〔西河郡〕のこと。現在の山西省汾陽市）

上党（一首。河東道潞州〔上党郡〕のこと。現在の山西省長治市。李白は「酬張司馬贈墨」に「上党碧松煙、夷陵丹沙末」と歌い、『新唐書』『地理志』にも土貢として墨が挙げられているように、墨の産地として知られる）

長平（二首。河東道沢州〔高平郡〕北部にある戦国時代の長平の戦の遺跡。秦将白起はここで趙に大勝利を収め、趙の降卒四十万を坑殺した）

王屋（二首。河東道沢州〔高平郡〕西南隅にある山。太行山の支脈。司馬承禎がここで得道するなど、道教聖山として知られる）

絳州（一首。河東道絳州〔絳郡〕のこと）

龍門（一首。河東道絳州〔絳郡〕龍門県にある黄河に面する龍門山、龍門関のこと。いわゆる「登龍門」で有名な場所）
李白の「黄河西来决崑崙、咆哮万里触龍門」、「公無渡河」は、その黄河の流れの激しさをめぐりに描き出した名句）

以上、李白詩に見える河北・河東の地名を整理してみた。李白にとつてはかなり疎遠な地とはいえ、広範にわたつて多くの地名を取り上げていることがわかる。用例数として比較的多いのは、「燕趙」（七首）、「易水」（九首）、「黄金台」（六首）、「邯鄲」（九首）、「太行」（八首）などである。興味深い点は、実際に現地で歌われたと認定できる作品が非常に少ないという点であろう。楽府や「古風」等、制作地が不鮮明な作品や、後日他所で回想している作例を除いて、現地制作と考えられる作品を概算してみると、約十二首（作品番号で示せば、735、893、335、319、473、320、762、653、703、321、547、1079）程度に止まってしまう。にもかかわらず、「序論」で述べたような多くの意義が内包されているというのが、この地方と李白との関係における大きな特色となっていると言えよう。次節以下、その点に留意しつつ論を進めていくことにしたい。

三、邯鄲と恒山と作品の流布と伝承の形成について

前節で触れたように、李白が実際に河東・河北地区において制作したと確定できる作品はわずかに十二首前後。その中で最も作品数の多いのが邯鄲での作であり、「自広平乗醉走馬六十里至邯鄲登城樓覽古書懷」「邯鄲南亭觀妓」「登邯鄲洪波台置酒觀發兵」の三作が現存している。また楽府題で、制作時期ははっきりしないが、「邯鄲才人嫁為養廩卒婦」という作品もある。「邯鄲南亭觀妓」は、邯鄲の美女たちの華麗な歌舞を眺めながら趙の平原君に思いを馳せるというもの。

また「登邯鄲洪波台置酒觀發兵」は、實際にこれから辺塞へ出兵しようとする軍隊を觀覽した感動を、勇ましく辺塞詩風に描いたもの。「邯鄲才人嫁為養廝卒婦」は、かつてはその美貌を誇り、意氣揚々と趙の後宮に入ったものの、結局、王に寵愛されることなく、捨てられて雑役夫の妻となつてしまつた女性の悲しみを歌つたもの。李白得意の宮女の怨みをテーマとした佳作である。しかし、邯鄲という、名勝古跡の宝庫たる古城を真正面から取り上げた作品は、唯一、次に挙げる「自広平乗醉走馬六十里至邯鄲登城樓覽古書懷」のみである。また、この作品は、数少ない李白の河北・河東地区における現地制作の詩の中で、最も長大で、かつ現地の様子が極めて具体的に活写されている作品として、非常に重要な意味をもつと考えられる。

自広平乗醉走馬六十里至邯鄲登城樓覽古書懷

醉騎白花駱、西走邯鄲城。「駱」は黒いたてがみの白馬

揚鞭動柳色、写轡春風生。「写轡」は轡を解くこと

入郭登高樓、山川与雲平。

深宮翳綠草、万事傷人情。（以上、邯鄲城への道程と古城の現状。馬は武靈王を連想させる）

相如章華顛、猛氣折秦嬴。（藺相如完璧の故事）

兩虎不可鬪、廉公終負荊。（廉頗負荊の故事。以上、藺相如と廉頗の故事）

提携袴中兒、杵臼及程嬰。

空孤獻白刃、必死耀丹誠。（以上、公孫杵臼・程嬰、趙朔の遺児趙武を救うの故事）

平原三千客、談笑尽豪英。（平原君三千の食客を養うの故事）

毛君能穎脱、二国且同盟。（毛遂脱穎の故事。以上、平原君と毛遂の故事）

皆為黃泉土、使我涕縱橫。

磊磊石、子岡、蕭蕭白楊聲。（「古詩十九首、其十四」を意識）

諸賢沒此地、碑版有殘銘。（以上、墓地での哀悼）

太古共今時、由來互衰榮。

傷哉何足道、感激仰空名。（以上、榮枯盛衰の感、名賢への思慕）

趙、俗愛長劍、文儒少逢迎。

閑從博徒遊、帳飲雪朝醒。

歌酣易水動、鼓震叢台傾。（以上、博戲・遊俠を尚ぶ趙俗を讚美しつつ痛飲放歌する）

日落把燭燭、凌晨向燕京。

方陳五餌策、一使胡塵清。（以上、北地で功績を残したいという気概を詠じる）

長篇でありながら、一韻到底という苦心の作である。その雄大な時空感覚といい、その緻密な構成法（邯鄲への来訪↓登高遠望↓荒廃した古城の実景↓英傑たちの輝ける業績↓再び実景、故墓群の描写↓榮枯盛衰に対する感慨↓趙の風俗に対する共感↓明日への期待、自らを鼓舞）、とりわけ、核となる人物讚歌の部分における、趙の功労者を二人一組にして挙げていくという巧みな手法といい、懷古詩を得意とした李白の諸作品の中でも、かなりの力作と言つてよいであろう。また、李白らしさという意味でも、「閑從博徒遊、帳飲雪朝醒」といった豪快な愛飲家ぶり、「歌酣易水動、鼓震叢台傾」といった大胆な誇張表現（「易水」は同じ「燕趙」地区とはいえ、邯鄲からは北三〇〇キロの遠方）、「方陳五餌策、一使胡塵清」といった「功成（身退）」的な人生観、将来に対する楽天的な明るさ——等々、李白的な魅力が十分に盛り込まれている。

以上のように、この作品は、李白らしい特色もよく現われており、また懷古詩としても秀作と言って過言ではない出来栄の作品である。にもかかわらず、この詩は後の詩話類においてもあまり話題にされていない。また、「詩跡」論の角度から見ても、地方志等に引き合いに出されることはほとんどなく、また、後世の邯鄲を歌う諸作品にもそれほど継承されていないようである。

その理由は様々に考えられるのであるが（例えば、あまりに長大な作品であるため暗唱しにくいとか、邯鄲関係の唐代文学については「邯鄲一炊の夢」のことわざともなった「枕中記」のインパクトがあまりに強かったため〔ちなみに現在も呂翁祠（黄梁夢）なる廟がある〕、邯鄲を訪れる文人の関心はそちらに向かったのではないか、等）、おそらくその最大の要因は、この作品が『分類補注本』に採られていなかったためではないだろうか。むしろこの作品は『宋本』『文苑英華』等に収められ、また清の『王琦本』にも収められているが、元・明代から清代にかけて最も通行した『分類補注本』に掲載されていなかったというのは、その影響力から見ても非常に大きいと言わねばならない（事実、明代の地方志『嘉靖』広平府志』にも「登邯鄲洪波台置酒觀發兵」及び「邯鄲才人嫁為養廝卒婦」の句は引用されているものの、この作品からの引用はない）。その意味で、この詩は、作品の流布・伝播が、「詩跡」形成——文学による土地イメージの生成発展——と密接に関わっているということの、ネガティブな意味での好例として見るべきであろう。

今日、『王琦本』やそれを底本とする李白集の流布によって、この作品はしだいに評価を得るようになってきている。林東海『中国カラー文庫・詩人李白』⁽⁴⁾では邯鄲の古道・古城壁・叢台の写真とともにこの作品は紹介され、また『李白大辞典』⁽⁵⁾「作品提要」のこの詩の条（王定璋執筆）では「全篇写得沈着痛快、淋漓酣暢、情景交匯、詩人將覽物・懷古・傷今和自己的行動融為一体、具有強烈的悲愴氣氛。」と評され、また李秋弟『詩仙游踪——李白与名山勝景』⁽⁶⁾（三十七）においても、他の邯鄲関係の諸作とともに、この作品が全篇にわたって掲載されている。もともと李白詩中における「邯鄲」という地名の用例数も、前節で見たように九首と、決して少なくはない。また中には、「古風其三十五」の「壽陵失本歩、笑

殺邯鄲人」のように、しばしば「邯鄲學歩」の故事の実用例として典故辭典等（例えば『常用典故詞典』⁽⁷⁾等）に引用される句も存在する。今後、邯鄲と李白の關係が、広く取り上げられていく可能性（場合によっては新たな伝説・伝承が加えられる可能性も含めて）は、十分予想されるのである。

しかし、土地と詩人との關係を考えるにあたって、今一つ考慮に入れなければならないのは、詩人イメージと土地イメージとの「融合・一体化のしやすさ」といった問題である。例えば、邯鄲及び燕趙一帯の地と言えば、ふつう高適の名が比較的容易に思い付く。これは、単に彼の作品の中に「邯鄲少年行」「燕歌行」といった、この地の雰囲気や巧みに描き出した傑作が多いということからだけではない。彼が辺塞詩人であるという評価・レッテル、あるいは氣骨ある軍略家でもあるというイメージが、この地のもつ「辺境地域への軍事拠点」という土地イメージとみごとに合致するからである。

李白の場合、河北・河東地区における実作数も少なく、また、その地との關係もそれほど濃密でない（また、優れた辺塞詩を数多く残しながら、「辺塞詩人」とまでは言われない）。よほどインパクトのある作品やエピソードが残され、それが後世の知識人なり地元民なりに、優れた作品、興味深い佳話として認知され、伝播・継承されていかないかぎり、彼の作品や行為が、そのままその土地に根付くことは難しい。李白という存在がこの地に定着するには、辺塞詩人としてではなく、別の要素、魅力によってでなくてはならない。その意味で示唆的なのは、次に挙げる恒山における李白伝承である。

まず、この件について、比較的詳しく記述している張劍揚『恒山導游』⁽⁸⁾「岳峰攬勝・巧奪天工懸空寺」の一節から引用してみることしたい。

伝説「五岳尋仙不辭遠」的詩仙李白曾慕名而來、當年詩人置身寺下、仰望瓊閣、驚愕地竟不知該用怎樣的詩句來形容、最後在寺下的一塊峭石上飛筆手書下斗大的「壯觀」二字。後人為了保存下太白的手蹟、又在「壯觀」碑傍修建了太白祠。

明代一位有心的地方官見「壯觀」二字因年久風化嚴重、於是又複製了一通碑、立在太白祠內。到清代道光年間、大同的府官又複製了一通「壯觀」碑、這通碑至今猶珍存在大同的華嚴寺裏。可惜太白祠已於解放前毀壞、明代的那通「壯觀」碑、現藏在恒山文物管理處。

筆者（寺尾）は、この件に関する地方志等の調査、現地取材等を行なっていないので、事実関係については後日に譲ることとしたが、管見のかぎり、全国レベルの地理書である清朝の『嘉慶重修一統志』卷一四六「大同府・祠廟」「太白祠」の条に「在渾源州南、『府志』：祠在南磁峽、明成化十九年建、祀唐李白、崑上有白書壯觀二字。」とあり、この記述からすると、太白祠が建設されたという明の成化十九（一四八三）年以前に、すでに「壯觀」碑は存在していたことになる（この碑に関する記述としては、その他、『王琦本』卷三六「外記」所引の『山西通志』に「壯觀」、唐李太白書、刻於大同府懷仁縣磁峽東崖上。筆力遒勁、人多摹搨。」とある）。

この恒山の李白「壯觀」碑が彼の真筆であるか否かは別にして、少なくとも、①懸空寺のある恒山はいわゆる渾源、恒山（明清代はこちらで祭祀を行なう。現在恒山と言えは一般にこちらを指す）であり、唐代に祭祀が行なわれたいわゆる曲陽、恒山のはるか北に位置しているということ、②李白の作品には「恒山」「北岳」等の名は全く登場せず、また訪れた形跡もない（ただしその南の太行山は訪れた可能性がある）、という二点だけは、明白な事実である。従って、この李白伝承は、限りなく疑わしい（と言うより、ほとんどありえない）眉唾ものの話と断じてかまわないのであるが、いわゆる「李白現象」（「序論」参照）として考えた場合、極めて興味深いのである。

と言うのも、この「壯觀」碑伝承は、全く根も葉もない附会と言うわけではなく、類似した伝承が、著名な山東省済寧の太白「酒」楼（現・李白紀念館）所蔵の伝・李白書「觀」字碑（一辺七八センチのほぼ正方形の石に刻まれる）にまつわる話として残っているのである。鄭修平『済寧名勝古跡』⁹⁾によれば、この碑は、李白が初めて済寧に訪れた際に書い

たものと伝えられ、早くは元の至正初（一三四一）年に発見、一時沛県の人物によつて所蔵されていたが、明代には済寧に移管、清初にいったん失われたものの、嘉慶六（一八〇二）年に太白樓の北壁の下から発掘され、さらに一九七八年夏に再度発見されたという複雑な経緯をもっており、もともと「壯」碑もあつて一対を成していたという。この話を裏付けるかのように、すでに明中期の孫緒の『沙溪集』卷二三「跋盧潤卿所藏李太白壯觀二大字墨本」（裴斐・劉善良編『李白資料彙編（金元明清部）』¹⁰（以下『李資彙』と略称）P.213）に、「此刻在済寧城南楼上、…決為太白手筆無疑。…太白訪焉、因留寓數月。日壺觴於南樓高处、風檣出沒、烟光吞吐、一舉目皆在簷楹几屏之下、太白因大書於扁曰『壯觀』、好事者刻之石。」とあり、また、やはり明代のものであるが屠隆『考槃余事』卷一「壯觀」（『李資彙』P.433）に「李白書二大字、在山東金鄉縣、今翻刻于済寧州城南楼上。」とあつて、済寧だけでなく金郷（済寧の西南約五〇キロ）にも「壯觀」の碑刻が存在したことがわかる。

この「壯觀」の刻字は、以後、各地に伝播したらしく、清の徐宗幹『斯未信齋雜錄』卷三（『李資彙』P.1173）に「山左済州工部祠在天井閣蓮亭内。太白、酒樓、東為浣筆泉、樓上有太白書『壯觀』二字。及至閬郡（四川省にある）、城内有杜公草堂、劍閣有思賢樓、供奉李白画像、山下亦有白書『壯觀』二字。時在保郡（四川省保寧、閬郡に同じ）補修『済州志』、跋文有云『瞻草堂於閬苑城中、画像思賢、仍如天井采蓮之地。懷太白於巴州山（劍閣山の意か）下『壯觀』遺墨、猶是酒樓浣筆之書。』昔年纂『保寧志』者、済州人史梅叔密、今分繕『済州志』者、皆保郡人。而史君現又官閬、『済州金石志』携至閬中、相与參訂文墨、固有一定之緣也。」とある（記述者の「壯觀」碑の流布に対する原因追求への情熱にも注意したい）。この記述によれば済寧の太白酒樓のみならず、遠く李白「蜀道難」ゆかりの四川省劍閣にも「壯觀」碑が存在していたことになる。また『王琦本』卷三六「外記」所引の『六研齋筆記』によれば「勝陽（現在の四川省成都の東南の簡陽県）駅序事前古槐之下、有石碣刻『壯觀』二字、殊勁挺、蓋青蓮筆。」とあり、四川省内においても、各地に伝えられていたと考えられる（その伝播の状況は、ちょうど米芾の書「第一山」が中国各地の山々に刻まれているのに似てい

る)。

こういった一連の記録から想像するに、この恒山のケースも、明清代に各地に流布していた李白の真筆とされる「壯觀」の書を何者かが懸空寺下に模刻し、それが後に李白自身がここに訪れたという伝承(誤伝)を生んだと考えるのが穏当であろう。しかし問題は、李白が作品を残しているわけでもないのに、何ゆえその伝承が、さも事実かのように情熱的に語り継がれ、ひいては太白祠まで建設されるに至ったか、という点にある。それはおそらく、李白という詩人のもつ個々のイメージと、李白に訪れてほしかったという人々の願望とがみごとに一致した結果と考えるのが最も適切ではないだろうか。換言すれば、多くの人々のもつ李白・恒山に対する通念・期待——即ち、①五岳(及び幾多の名山)を愛した李白が、他の四岳を訪れながら、恒山にだけ訪れていないなどということはありえない、②李白が河北・河東の地(恒山の近く)を訪れているのは歴史的事実である、恒山を訪れていたとしても不思議ではない、③著名人・人気者の李白が恒山を訪れていたとすれば、その宣伝効果は抜群である(李白遺跡の少ない燕趙地区においても、可能なかぎり李白モニュメントを造りたいという現地人の情熱もあろう)、④断崖絶壁に懸かる渾源恒山の懸空寺の勇壮さは、誰もが驚く、あの豪放大胆な詩人・李白でさえ一見すれば度胆を抜かれたはずである、⑤恒山のもつ雄大なスケールは、李白の壮大な詩風を生で感じさせる迫力をもっている、等々の思念や願望が、「壯觀」碑、あるいは太白祠として結実したと解釈されよう。

ここで重要なことは、強弱は別にしても①～⑤いずれも、李白本人の実像以上に、李白に対する後世のイメージが、伝承の原動力となっている、ということである。さらに言えば、それが李白自身、あるいは李白詩歌の本質から決して遠く離れてはいない、という点も重要なポイントであろう。李白詩のもつ豪放さ、力強さ、壮大なスケール感、といった側面が、この北辺の山岳地帯のイメージにマッチするのである。

本節では、李白と河東・河北の関係を見るにあたって、作品が流布せず、これまであまり取り上げられなかった邯鄲の例と、作品が残っていないにもかかわらず、詩人イメージと合致するがゆえに伝承の広まった恒山の例と、いわば両極端

の例を取り上げてみた。邯鄲は、多くの詩人たちによって歌われるという意味で、まぎれもなく「詩跡」であるが、後世への伝播という意味では、李白の影響力はそれほどではない（少なくとも李白詩によって邯鄲のイメージが發展なり変化するには至っていない）。一方、恒山の「壯觀」碑・太白祠伝承は、今日の恒山のガイドブック等に頻繁に取り上げられているように、現在でも大きな影響力をもっている。恒山は李白の作風イメージと重なり合うことによって、一層その壮大さが際立つのである。その意味で、李白は、結果として恒山の「詩跡」化に間接的に貢献したこととなるう。

ただ、この邯鄲・恒山の例は、他の様々な「李白現象」から見れば、かなり極端な例であって、やはり、実際に李白が足跡を残し、作品も存在し、それがある程度流布して、やがては伝承も生まれてくる、といった段階を経るのが通常のケースであろう。その意味で興味深いのは、次節に挙げる太原の例である。

四、太原～「太原早秋」・晋祠・李郭互救伝承を中心に

李白の現存作品のうち、太原において制作されたと確定し得る作品は、わずかに「太原早秋」と「秋日於太原南柵饒陽曲王賛公買少公石艾尹少公応奉赴上都序」の二篇のみである。後者は、詩ではないが、李白らしい雄大な筆致で太原を描いているので、まずはその一部をここに挙げておきたい。

天王三京、北都居一、其風俗遠、蓋陶唐氏之人歟。襟四塞之要衝、控五原之都邑、雄藩劇鎮、非賢莫居。…然後抗目遠覽、憑軒高吟。屏俗事于煩襟、結浮歎于落景。俄而皓月生海、來窺醉容。黃雲出関、半起秋色…。

李白と太原の関わりについては、『嘉慶重修一統志』卷一三七「太原府二」「流寓・李白」の条に「天寶中、客并州。有

『太原早秋』詩。晋祠尤為亟遊地。嘗見郭子儀奇之、子儀犯法、白為求免。」と記述されているように、①「太原早秋」、②晋祠遊覽、③李郭互救伝承、の三点に絞られるであろう。

まず、「太原早秋」について述べると、これは詩人・李白という側面から見ても彼の代表作の一つであらうし、また、太原という土地から見ても、この地を歌った歴代の作品の中にあつて屈指の名篇の一つと言ふことができよう。

太原早秋

歳落衆芳歇、時当大火流。

霜威出塞早、雲色渡河秋。

夢遶辺城月、心飛故国樓。

思歸若汾水、無日不悠悠。

北方の風土は、寒さの始まる早秋こそ語るにふさわしい——そういった雰囲気でこの作品は統一されている（おそらく、漢の武帝の河東での作とされる「秋風辞」に着想を得ている）。「歳落ち衆芳歇み、時は大火の流るるに当る」——あらゆる草花の枯れ落ちる秋、北辺は「大火」（南方・夏の象徴であるサソリ座アンタレス。また春秋晋国の守護星の一つとも言う）の沈む時期も早い——。これは、旅愁を抱く旅人であつてこそ鋭敏に感じ取れる感覚である。「霜威塞を出でて早く、雲色河を渡つて秋なり」——この聯は、太原の秋の雰囲気をみごとに描いた警句と言えよう。「塞」「河（黄河のこと）」は太原の土地柄を象徴するにふさわしく、また「霜威」「雲色」も寒さ厳しい北辺のイメージにびつたりとくる。特に「出塞早」「渡河秋」の対は、北方の季節の移り変りの速さ、大地の広大さ・荒涼感を簡潔に描いて、みごとである。「夢は遶る辺城の月、心は飛ぶ故国の樓」は、辺境地帯であるがゆえに、「立功への夢」と「望郷の念」という二つの相容れない

願望が交錯する、というのを、幻想的な筆致で描いている。特に「夢遶…、心飛…」の対が優れる。「夢」「心」という心の現象を表す語に、「遶」「飛」といった流動感あふれる動詞を直結させて、相矛盾する二つの心の揺らめきを動的に描き出している。「帰らんと思へば汾水の若く、日として悠悠たらざるは無し」——ここで李白は太原で最も著名なランドマークの一つ「汾水」を登場させ、その河の流れに望郷の思いを託す。河の流れに自らの心を運んでもらう、という発想は、「寄言向江水、汝意憶儂不。遙伝一掬淚、為我達揚州」(「秋浦歌、其一」)、「裂素写遠意、因之汝陽川」(「寄東魯二稚子」)のごとく、李白得意のパターンである。全篇を通じて、「大火」「霜」「雲」「月」「汾水」と、白さ、輝き、透明感、流動感を感じさせる語彙を随所に配することによって、郷愁は郷愁でも、どこかカタルシス(心的浄化)を感じさせるものとなっている。少なくとも澁んだ沈鬱な感覚はなく、その点も李白的である。

この詩は、唐詩を代表する作品として、『唐詩品彙』『唐詩解』『唐宋詩醇』『唐詩別裁集』等に採られており、李白詩の中でも比較的普及度の高い作品の一つとなっているが、また一方で、本稿の主旨である土地と詩人との関係、あるいは「詩跡」論の立場から見ても非常に興味深い作品と言える。特に注意しておきたいことは、この「太原早秋」が、後世の読者に対して、李白と太原との結び付きを強烈に印象付ける要因の一つとなっていることである。換言すれば、この詩(及び後述の「憶旧遊寄譙郡元參軍」)の知名度によって、李白が太原に流寓したことは、李白愛読者のみならず、多くの人々の知るところとなったわけである(ちなみに、中唐の令狐楚の「遊晉祠上李逢吉相公」(『全唐詩』卷三三四)に「相思臨水(ここでは汾水の支流、晋水を指す)下双淚、寄入并汾向洛川」とあり、これが「太原早秋」の尾聯に着想を得たものとすれば、早くも李白直後の段階で、この作品は太原を歌う詩の中に継承されていることになる。また、この詩の太原における知名度・普及度という観点から見ても、例えば明代の地方志(『嘉靖』太原県志)卷六「集詩」の筆頭を飾っており、その地位の高さは容易に想像がつく)。

この「太原早秋」の他に、今一つ、李白が太原との関係の上で、後世に強烈な印象を残したものとして挙げられるのが、次の「憶旧遊寄譙郡元參軍」の一節である。この作品は全四段構成で、元參軍（元演）との交遊が、①洛陽での出会い、②隨州での仙遊、③太原での遊覧（元演の父は太原の尹）、④譙郡での再会と別離、と、時の流れに沿って語られている長篇の作品（六十二句）で、以下はその第③段に相当する（二十句、全体の三分の一を占める）。『唐詩品集』『唐詩解』『唐宋詩醇』『唐詩別裁集』等の明代以降のアンソロジーだけでなく、唐代の『河嶽英靈集』、北宋の『文苑英華』にも選入されており（また北宋・黃庭堅の写したこの詩の書は、彼の書の代表作の一つに数えられているということも書法家の間では有名）、知名度・影響力という意味では、「太原早秋」のそれを上回っていると言えるかもしれない。

憶旧遊寄譙郡元參軍

.....

君家嚴君勇貔虎、作尹并州遏戎虜。
〔嚴君〕は父親の意

五月相呼渡太行、摧輪不道羊腸苦。

行來北、京、歲月深、感君貴義輕黃金。
〔北京〕は太原を言う

瓊杯綺食青玉案、使我醉飽無歸心。

時時出向城西曲、晉祠流水如碧玉。

浮舟弄水簫鼓鳴、微波龍鱗莎草綠。

興來携妓恣經過、其若楊花似雪何。

紅妝欲醉宜斜日、百尺清潭写翠娥。

翠娥嬋娟初月輝、美人更唱舞羅衣。

清風吹歌入空去、歌曲自繞行雲飛。

.....

この作品が高く評価される最大の理由の一つは、唐汝詢『唐詩解』〔卷一九〕が「此篇叙事、四転、語若貫珠、又非初唐牽合之比、長篇當以此為法。」と述べるがごとく、その構成法のみごとさにあることは論を俟たない。しかし、晋祠遊覽の楽しみ・晋祠流水（及び妓女）の美しさを歌うこの当該箇所について言えば、「晋祠の流水碧玉の如し」「微波龍鱗莎草緑なり」「其の楊花雪に似たるを若何せん」「百尺の清潭翠娥を写す」等、佳麗な秀句が集中的に多く表れており、一首全体の中でもとりわけ印象的な部分である。この一節によって、李白の名は晋祠において忘れられない存在となり、また晋祠の名も全国的に一層知名度を高めることになったと言つてよい。太原晋祠は、確かにそれ以前から長い歴史を有していたが（『水經注』「晋水」に「唐叔虞祠」と見えるのがおそらく文献的には最も古い）、すでに周代晋国の時代から晋水の水源として神聖視されていたであろうことは想像に難くない。また唐の高祖・太宗が起兵の際祈願し、後、太宗が自撰の「晋祠之銘并序」碑（『全唐文』卷一〇）を建てさせたことは有名）、李白によってその「詩跡」化が始まったと言つても過言ではない。

昨今に限つてみても、例えば、現在の晋祠では、この詩の「時時出向城西曲」から「歌曲自繞行雲飛」までの部分が「晋祠流水」というタイトルで伝えられており（諸定耕主編『中国名人勝迹詩文碑聯鑑賞辞典』〔山西省太原市・晋祠〕〔孟達執筆〕の条参照）、また晋祠文昌閣には、かつて李白を記念する太白祠が存在したと言ひ（林東海『中国カラー文庫・詩人李白・上』参照）、また「流碧榭」という建築物（李白の「晋祠流水如碧玉」句に因む）が今も存在している。ちなみに（嘉靖）太原県志」には、晋祠太白祠の記述はないが、卷一「晋水賢祠」の条に「在晋祠南。初名晋溪書院。撫按三司為王恭襄公建。…唐・李太白、宋・韓魏公、范文正公、歐陽文忠公、与公木主同祀於前堂。」とあり、李白を筆頭に歴代の晋祠訪問文人を合祀した祠が明代には存在したことが確認できる。李白のこの作品が、晋祠においていかに絶大な影

響力をもっているかがうかがえる。

むろん、「詩跡」という観点からすれば、詩歌（ないし言語芸術）によって継承されるのが理想的であるが、その意味では次に挙げる『中国名人勝迹詩文碑聯鑑賞辭典』（前掲の条）の記述が注目される。本書は、まず「晋祠是由唐太宗撰写的『晋祠銘』和李白『晋祠流水如碧玉』的詩句而名揚四海的。此後歷代名人題詠不絶、遊人也隨之日盛、現今已擴展為晋祠公園。」と、この地が太宗と李白によつて知名度を上げ「詩跡」化されたことを述べ、次いでこの詩の当該箇所について「『聯翩写来、景中涵情、情中寓意、交融化合、渾然一体。彷彿詩人李白遊晋祠的情景即在眼前。而『晋祠流水如碧玉』、『百尺清潭写翠娥』二句、便成了描繪晋水的千古名句、因之晋祠的名泉流水便也隨之而名聞於後世了。」と、その詩句を絶賛しつつ、これによつて晋祠の泉や流水が後世に知られるようになったと再度強調する。また、さらに続けて、「此後唐宋元明清的許多著名詩人、便相繼遊晋祠、留下了不少吟詠晋祠流水的名篇佳作。」と、唐の李益・白居易、宋の范仲淹・歐陽脩、元の元好問・李術魯腫、明の于謙の晋祠關係の諸作を挙げ、「李益・白居易的詩和李白的詩一樣、都写的是晋水遊樂的盛況、可以想見当年此地早已成為全国知名的遊覽勝境了。范仲淹・歐陽脩的詩、則着重写晋水溉田之利、一片憂民之心、拳拳於紙上。元好問以後詩、則多写晋水的神秘感、……。這大概与時代思潮及詩人的处境有關係吧？」と、「詩跡」としての文学史的な変遷にも言及している。

これらの指摘に関連して、李白の晋祠の描き方について若干の補足を加えるならば、特に注目すべきは、本来、莊嚴な祭礼の場であるはずの晋祠を、彼が、歌妓あり舟遊びありの華やかな遊覽の場として描いたという点にある。確かに「晋祠」の名が詩に現れるのは管見による限り、現存作品の中で李白が最も古い（「晋水」に関しては王昌齡「駕幸河東」に「晋水千廬合」とある）。しかし、それにも増して重要なのは、この詩の与えるインパクトの強さである。すでに指摘したような華麗で明朗な句の数々、さらには、あえて晋祠の歴史のもつ莊重さを一切捨象し、その遊覽の楽しみ・景物の美しさのみを追求するという大胆な試み（むろんこの詩は元演との旧交が主題であるとはいえ、晋祠の歴史性、特に自ら同族と

称する唐王朝ゆかりの地であるにもかかわらず高祖・太宗について全く触れていないのは極端）等々。晋祠のイメージは、確かに李白によって少なからず変質したようである。

李白以後、唐代の晋祠を歌う作品は、総じて遊覧気分のものである。李益「春日晋祠同声会集得疏字韻」（『全唐詩』卷二八三）の「水亭開簾幕、巖樹引簷櫺。…菱荇生皎鏡、金碧照澄虛」、令狐楚「遊晋祠上李逢吉相公」（『全唐詩』卷三三四、前掲。最終句に李白の「太原早秋」の影響がうかがえる）の「泉声自昔鏘寒玉、草色雖秋耀翠鈿」、劉禹錫「重酬前寄」（『全唐詩』卷三六〇、令狐楚に酬いたもの）の「新成麗句開絨後、便入清歌滿座聽。吳苑晋祠遙望處、可憐南北太相形」（「新成麗句開絨後、便入清歌滿座聽」の二句は杜甫の「戲為六絕句、其五」の「清詞麗句必為隣」と李白の「清風吹歌入空去、歌曲自繞行雲飛」を融合転化させたものか）、元稹「悟禪三首寄胡果、其三」（『全唐詩』卷四〇九）の「近見新章句、因知見在心。春游晋祠水、晴上霍山岑」、白居易「又和令公新開龍泉晋水二池」（『全唐詩』卷四五七、「晋祠」の名は見えないが「龍泉」は晋祠内の泉。「令公」は裴度）の「笙歌聞四面、樓閣在中央。春變煙波色、晴添樹木光」などが、その例として挙げられる。果たしてこういった傾向が直接李白の詩の影響であるか否かは定かではない。しかし少なくとも、唐代詩人の多くが遊覧感覚で晋祠を描いていたということ、その中でも李白のそれがひときわ目立って極端であること、という二点は、これらの作品を通じて確認しうるであろう。時代は下るが、李白を敬愛した北宋の歐陽脩が「晋祠」（『歐陽文忠公集』卷三）において「并人昔遊晋水上、清鏡照耀涵朱顏」と歌った、その、鏡のごとき晋水に映ったかつての「朱顏」とは、まさしく李白の描く「百尺の清潭に翠娥を写」した「紅妝」の「美人」であつたにちがいない。以上、李白の太原関係の作品の中で、後世への影響が比較的大きいと見られる「太原早秋」「憶旧遊寄譙郡元參軍」の二作を取り上げてみた。この二作によって、李白が太原を訪問したことは、李白愛読者のみならず、多くの人々の間に知れわたることとなったと考えられるわけであるが、これは視点を変えれば、太原において「李白伝説」「李白現象」が生まれる土壌ができたことをも意味している。

李白が太原において無名時代の郭子儀（六九七―七八一。安史の乱時の英雄的武將）を救ったという伝承は、早くも唐代に生まれている。その出処は、唐の裴敬が会昌三（八四三）年（李白没後八十二年）に記した「翰林学士李公墓碑」の一節、「…（李白）又嘗有知鑑。客并州（太原）、識郭汾陽（郭子儀は、宝應元（七六二）年、汾陽郡王に封ぜられた）於行伍間、為免脫其刑責而獎重之。後汾陽以功成官爵、請購翰林、上（肅宗）許之、因免誅（李白永王李璘軍参加の罪を指す）、其報也。」という記述である。この説は、北宋に至って、樂史の「李翰林別集序」や「新唐書」「李白伝」によって世に広く紹介され、さらに、蘇軾が「太白識郭子儀之為人傑、而不能知璘之無成、此理之必不然者也。吾不可以不弁。」（「李太白碑陰記」）と、李白の永王軍参加が自主的なものであったか脅迫によってであったかという、よく知られた李白伝記上の一大懸案にからめたことによって、一気に衆人の知るところとなった。

以後、この逸話は、李白が人物鑑定に優れた人間であったということの例証として、しばしば引き合いに出され、李白の伝を語る上での不可分の一要素、李白イメージを構成・規定する重要な一部分となつて継承されていく。『李資叢』（前掲）を概観しても、金元代から清代に至るまでに四十例近く（うち金元代五例、明代七例）にわたつてこの逸話に関わる言及が見出され（特に詩歌によつて讀えられることが多い）、「力士脱靴」「貴妃捧硯」「玄宗調羹」「知章換金」「李杜相会」「永王徵召」「尋陽繫獄」「長流夜郎」「捉月騎鯨」等の著名な事件・逸話と、ほとんど同等ないしはそれに肉薄する地位を獲得していることがわかる。他の李白関係の人物との併用例に限定して挙げれば、例えば王惲「李白醉吟圖」（『李資叢』P. 34）の「力士傍無識子儀」、舒遠「李謫仙」（P. 99）の「氣吞高力士」、眼識郭汾王、宋濂「題李白觀瀑布圖」（P. 120）の「并州可識郭汾陽、不可丹陽逢永王」、舒位「題任城太白酒樓」（P. 107）の「結客須結賀知章、相士須相郭汾陽」、姚椿「和人涉上懷古詩」（P. 1123）の「大星長鯨定誰是、汾陽賀監都堪伝」、湯貽汾「采石磯題太白祠」（P. 1124）の「豈愛詩名王工部、独拚功業与汾陽」等の用例が見出される。興味深い例としては、清・李星沅「郭汾陽祠」（P. 1205）に「如何金甲班師日、不奉清尊拜謫仙」とあるように、郭子儀の祠廟を歌う作品にまで李白が登場しているケースさえある。また、周知のごと

く、明の『晉世通言』「李謫仙醉草吓蕃書」（後『今古奇觀』にも収録）にも、この逸話は登場している（長安が舞台となっている関係上、李白が郭子儀を救うのも長安のこととしているが、それでも「并州」（太原）から護送されてきたと言っている）。

ここで当然、疑問となるのは、郭子儀の伝を一読すれば、この伝承が極めて疑わしい、というより、ほとんど成立困難な説話であることが明白であるにもかかわらず（郭子儀は当初から武挙に合格（李白十代の頃）した武人エリートであり、李白が太原を訪れた頃（七三五年頃）には、すでに左威衛中郎将か安西副都護の高位にあった）、なにゆえこれほどまでに強固に定着し、信じられてきたのか、という点である。すでに清代を代表する歴史学者・趙翼が『歐北詩話』巻一において、「……然青蓮集中無一字与子儀往来者。当其繫獄時以詩上崔渙・宋若思求雪、如果有德於子儀、豈無一字乞援。即或道遠不相及、而子儀救釈之後、何又無一字述其恩記其事。則此事之有無未可信也。集中有『贈郭將軍』一首云、『將軍少年出武威、入掌銀台護紫微。』此又非子儀履歷、当另是一人。」と疑問を投げ掛けているにもかかわらず、それ以後もこの伝承は衰えることなく継承され続ける。事実上、この伝承が偽りであると認証されたのは、詹鏐『李白詩文繫年』が世に広まる、ここ数十年の間である。おそらくそれ以前においても、疑いをもった人物が存在したであろうが、大多数の間が、いかにも李白らしいエピソードと考え、李白イメージを形成する重要な一部として受け入れてきたわけである。

結局、事実としては、李白が太原を訪問したことがあること、郭子儀が太原近くの汾陽郡王に封ぜられたということ、という二点が挙げられるだけである。しかし、裴敬（あるいは彼にその情報を提供した者）に始まるこの伝承が、さも事実であるかのように信じられ続けた、その最大の要因は、おそらく李白読者の期待と願望に求める以外にはないであろう。盛唐期を代表する玄宗・楊貴妃・高力士・賀知章・杜甫といった大人物に会ったこともあり、それぞれに彼らしい逸話を残している李白であるなら、英雄・郭子儀に出会い、何らかの興味あるエピソードを残していたとしても不思議ではない、という期待が、李白の太原訪問という歴史的事実を介して、一気に爆発したと考えるのが、おそらくその真相に近い。まさ

しく、「李白伝承」というものが、土地との結びつきによって成長していくという、その格好の例であると言えるであろう。

五、幽燕の地く易水・黄金台・独楽寺伝承を中心に

李白は、第二節〈表〉で見てきたように、河北・河東の地全般にわたって、多くの名勝古跡・「詩跡」を詩に取り上げている。邯鄲・太原地区はすでに見てきたが、その他、「北上何所苦，北上緣太行」（「北上行」）、「欲渡黃河水塞川，將登太行雪滿山」（「行路難，其一」）、「迢迢五原閼，朔雪亂辺花」（「千里思」）、「邯鄲四十萬，同時陷長平」（「繫尋陽上崔相渙，其一」）、「黃河西來決崑崙，咆哮萬里觸龍門」（「公無渡河」）、「漢下白登道，胡窺青海灣」（「閼山月」）、「燕支黃葉落，妾望白登台」（「秋思」）、「燕山雪花大如席，片片吹落軒轅台」（「北風行」）、「燕谷無暖氣，窮巖閉嚴陰」（「鄒衍谷」）、「去年戰，桑乾源。今年戰，葱河道」（「戰場南」）、「我以一箭書，能取聊城功」（「五月東魯行答汶上翁」）、「生前一笑輕九鼎，魏武何悲銅雀台」（「魯郡堯祠送竇明府薄華還西京」）、「雷聲動四境，惠与清漳流」（「贈漳明府倕聿」）、「蕭然松石下，何異清涼山」（「同族侄評事黯遊昌禪師山池，其一」）、「淇水流碧玉，舟車日奔衝」（「魏郡別蘇明府因北遊」）、「魏都接燕趙，美女誇芙蓉」（「同上」）、「昔別雁門閼，今戍龍庭前」（「古風，其六」）、「鉄騎若雪山，飲流涸淳沱」（「發白馬」）等々といった例が挙げられる。中には、いかにも「詩跡」の詩人・李白らしい巧みな土地表現も多く見られる。

これら河北・河東地区の土地の中でも、李白がとりわけ数多く言及しているのが、燕の昭王と郭隗ゆかりの「黄金台」と、燕の太子丹と荆軻・高漸離ゆかりの「易水」である。まず、「易水」について触れると、李白の用例数は九例と、非常に多い。そのほとんどが荆軻の故事を踏まえているという点は、非常に特徴的であるが、むしろこれは左思「詠史，其一」、陶淵明「詠荆軻」、駱賓王「易水送別」以来の伝統を引き継いだだけのこととも言える（換言すれば、易水はすでに「詩跡」として完全に定着してしまっていた）。ただ、詳細に見てゆけば、李白らしい特色が現われているケースも多い。

例えば、「恥作易水別、臨岐淚滂沱」（「留別于十一兄逖裴十三遊塞垣」）や「羞道易水寒、從今日貫虹」（「結客少年場行」）のように、易水送別の悲しみをあえて否定することによって、一層の力強さを詩に与えるといった手法は、李白ならではの感がある。しかし、土地という観点から見た場合、最も興味深いのは次の作例である。

少年行、其一

擊筑飲美酒、劍歌易水湄。

經過燕太子、結託并州兒。

少年負壯氣、奮烈自有時。

因声魯句踐、爭博勿相欺。

この作品は、「少年行」という樂府題や、「結託并州兒」「少年負壯氣、奮烈自有時」といった表現からもわかるように、一見詠史風に見えながら、実は高漸離・荆軻・魯句踐といった人物は、あくまで燕趙の少年らのモデルであり、典型である。李白は彼らを通して、この地方の、「感慨悲歌」（韓愈「送董邵南序」の語）の風、義侠を重んずる風、賭博を愛する風といった、独特の風俗を描き出そうとしているわけである。この詩はその意味で、「易水」「并州」の土地讃歌の作品と見てよいであろう。ちなみに土地イメージという意味では、李白が安祿山軍によって陥落した洛陽一帯について、「洛川為易水、嵩岳是燕山」（「奔亡道中、其四」）と歌っている点が興味深い。李白の意識の中に、易水は幽燕地方を代表する河川という認識があったことをうかがわせる。

いずれにせよ、李白が、おそらくは一度しか訪れていない「易水」という地名を頻繁に用いた要因としては、①すでに「詩跡」として定着していたこと、②荆軻をはじめとする燕趙地方の任侠の風への強い共感があったこと（李白が若い時

期から俠客というものに強く憧れていたことはよく知られている、③彼自身、生来的に土地そのものに対する強い関心・愛着があったこと（李白は地名を詩に詠み込むことを好む）、といった理由が考えられるであらう。

上述のごとく「易水」は、李白の時代にあつては、すでに「詩跡」化されていた土地であるが、彼が今一つ詩に頻繁に詠み込んでいる「黄金台」（六例）については、一考を要する。まずは、古来から議論の的になっている、この「黄金台」なる名称についての言説を挙げてみることにしたい。

(1) 秦觀少游、一日写李白「古風」詩三十四首於所居重隱壁間。予因問「燕昭延郭隗、遂築黄金台」之詩、史但言築宮而師事、不聞黄金之名。太白不知何拠。少游曰「上谷図経」言「昭王築台、置千金於其上。遂因以為名。」閱之信然。（北宋・撰者未詳『道山清話』）

(2) 李白「古風」云、「燕昭延郭隗、遂築黄金台。劇辛方趙至、鄒衍復齊來。」余攷「史記」不載黄金台之名、止云昭王為郭隗改築宮而師事之。孔文舉与曹公書（孔融「論盛孝章書」）曰「昭王築台、以尊郭隗。」亦不著黄金之名。「上谷郡図経」乃云「黄金台在易水東南十八里、燕昭王置千金於台上、以延天下士。遂因以為名。」皇甫松（中唐後期頃の人）有「登黄金台」詩（『全唐詩』卷三六九では「登郭隗台」に作る）云「燕相謀在茲、積金黃巍巍。上者欲何顏、使我千載悲。」其迹尚可得而考也。（南宋・葛立方「韻語陽秋」卷六）

(3) 【黄金台】『道山清話』云「…（省略）（1）参照」余按孔融「論盛孝章書」已云「昭王築台、以尊郭隗。」少游未之考也。又「晋書」（王隱著）云「段匹磾討石勒、進屯固安縣故燕太子丹金台。」然則金台之事、不独昭王而已。（明・胡侍「真

(4)『金台』『職方考鏡』「安州北、燕昭王築黄金台於此、以延賢士。」故今燕京亦称金台。按『史記』止云「為魏改宮而師事之。」初無「台」字。而李太白詩有「何人為築黄金台」(現存の李白集に見えない。「行路難、其二」の「誰人更掃黄金台」の句の記憶違いか)之語。吳虎臣「漫錄」以此為拠。然杜子美、柳子厚詩、「白氏六帖」、皆有「黄金台」語、不独本於白也。又按『唐文粹』有皇甫松「登黄金台」詩。又梁任昉「述異記」「燕王為郭隗台。」又後漢孔文舉「論盛孝章書」曰「昭王築台、以尊郭隗。」亦皆無「黄金」字。宋・鮑照「放歌行」「豈伊白璧賜、將起黄金台」則「黄金」之名、始見於此。「水經注」亦有「金台」字云。(明・張存紳「雅俗稽言」卷五、『李資集』P.545)

以上、宋代から明代にかけての「黄金台」に関する代表的な記述を挙げてみたが、(1)～(4)いずれも、李白の詩に刺激されて「黄金台」の語に対する興味が喚起されているという点が注目に値する。それだけ李白詩(とりわけ「古風、其十五」)における「黄金台」という表現のインパクトが強かったのである。

結論から言えば、(4)の論が最も詳細を極めており、これを改めて整理すると、「黄金台」なる名称は、現存資料による限り、南朝・宋の鮑照「放歌行」に始まり、李白によって継承され、以後、杜甫・柳宗元・白居易・皇甫松ら後の唐詩人によって完全に定着した、と考えるのが穏当であろう。ただし、これに若干の補足を加えるならば、陳子昂の名を忘れてはなるまい。彼の幽州在任期における代表的作品「薊丘覽古贈盧居士藏用七首」のうち、「燕昭王」に「南登碣石坂(一作「館」)、遙望黄金台」とあり、また「郭隗」に「隗君亦何幸、遂起黄金台」とある。従って厳密に言えば、鮑照以来、この語を復活させたのは陳子昂であり、李白はおそらく彼の影響でこの語を多用したに違いない(李白の「古風五十九首」が陳子昂の影響を強く受けていることは広く知られる)。(1)～(4)いずれも陳子昂の例を挙げていない点、疑問が残るが、

それだけ李白の作品が、陳子昂をかすませてしまうほど印象的であつたのであろう。また李白以後の有力詩人の「黄金台」の詩中用例数を調査してみると、劉長卿一例、杜甫二例、柳宗元一例、李賀一例、李商隱一例、胡曾一例となる。なお白居易詩には用例は見られないが、『白孔六帖』卷一〇「台・築台置金」の条に「黄金台」の語が見える。「黄金台」の呼称が唐代において不断に継承されていることが確認できる。

また、鮑照「放歌行」当該箇所「文選」李善注は、「王隱『晋書』曰『段匹磾討石勒、進屯故安県（固安県）に同じ。隋代に一時「固」字に改められた。易州にある）故燕太子丹金台。』上谷郡図經曰『黄金台、易水東南十八里、燕昭王置千金於台上、以延天下士。』二説既異、故具引之。」と述べている（「金台」の名は「水經注」「易水」にも見える）。おそらく、鮑照は孔融の「昭王築台、以尊郭隗」の言と、燕太子丹ゆかりの「金台」の語に着想を得て「黄金台」なる造語を生み出したものと考えられる。李善が二説を並行して取り上げたのは、鮑照の「放歌行」の場合、昭王・燕太子いずれの故事にもあてはまるからであろうが、李白の場合、専ら昭王の故事に基づいていると判断される。

李白のケースを列挙してみると、①「燕昭延郭隗、遂築黄金台。劇辛方趙至、鄒衍復齊來。奈何青雲士、棄我如塵埃。

珠玉買歌笑、糟糠養賢才。方知黃鶴舉、千里獨徘徊」（古風、其十五）、②「君不見昔時燕家重郭隗、擁篲折節無嫌猜。劇辛樂毅感恩分、輪肝剖胆效英才。昭王白骨縈蔓草、誰人更掃黃金台。行路難、歸去來」（行路難、其二）、③「繡服開宴語、天人借樓船。如登黃金台、遙謁紫霞仙。……」（在水軍宴贈幕府諸侍御）、④「攬涕黃金台、呼天哭昭王。無人貴駿骨、綠耳空騰驥。樂毅儻再生、于今亦奔亡。……」（經亂離後天恩流夜郎憶旧遊書懷贈江夏韋太守良宰）、⑤「英明廬江守、聲譽廣平籍。灑掃黃金台、招邀青雲客（「客」は李白を指す）。……」（寄上吳王、其三）、⑥「侍筆黃金台（こゝでは永王軍の幕府を指す）、伝觴青玉案。不因秋風起、自有思婦嘆。……」（南奔書懷）となる。

いずれも、賢才を厚遇する君主の到来を強く憧れる李白の情熱が、異様なほどの迫力をもって語られている。読者の脳裏に強く焼き付くのは当然といえ、ば当然である（とりわけ①は理想と現実とのギャップに対する激しい憤りが強く現われ

ており、非常に印象的。また②③⑤⑥は色対が効果的。(1)~(4)に挙げた諸論の「黄金台」という呼称への情熱的な探求は、李白の熱情に触発されてのゆえであると言っても過言ではあるまい。鮑照以後、永らく眠っていた「黄金台」という語は、まずは陳子昂によって復活し、さらに李白が卓抜した技量をもって、より印象的に使用した（しかも多用した）ことによって、確固とした「詩語」（また同時に「詩跡」として定着するに至ったと考えてよいであろう）。

ちなみに「黄金台」の所在地については、いくつかの異説があるが、大きく分ければ戦国燕の下都（唐代の易州易県）近辺か首都・薊（唐代の幽州薊県）近辺か、という二説となる。李善の引く前掲『上谷郡図経』によれば前者であり、一応、前者が説として有力であるが、陳子昂「薊丘、覽古贈盧居士藏用七首」（序から薊県での作であることは明らか）中の「燕昭王」の場合は、おそらく後者と考えられる。つまり「南登碣石坂（一作「館」、遥望黄金台）」とあり、「碣石」は別名「碣石館」「碣石宮」、薊県東にあった建築物である（昭王が鄒衍のために建てたという伝承がある）。そこから「遥望」できるとすれば、誇張表現でもなければ薊県の「黄金台」と見做すのが穩当であろう。『讀史方輿紀要』卷一〇「順天府・宛平県・黄金台」の条に「府東南十六里。又北里許為小黄金台。燕昭王嘗於易水東南築台、以延天下士。後人慕之、因築焉。」とあり、顧祖禹も易州のそれに軍配を挙げつつも薊県の黄金台を無視できなかったことがわかる。いずれにせよ、所在地については諸説紛々というのが実情である。

そもそも、燕の昭王が黄金台を建設したというのも伝承の域を出ないし、また、当時昭王が首都にいたのか下都にいたのかさえも『史記』には明記されていない。従って、所在地についても、実際に存在したかも疑わしいがゆえに、その候補地は時代が下るにつれて増加するいっぽうである。「黄金台」は、史実から出発したとはいえ、常に詩が主体となつて、そのイメージを形成・発展させてきた地名と言うことができよう。その意味で、「黄金台」は「史跡」というより、まさしく「詩跡」という名称こそふさわしい（『黄金』の「台」という名称の詩的な美しさにも注意されてよい）。しかも、この「詩跡」は、実際の土地を離れて、地名のみが詩人たちの自由な想像力に任せて一人歩きしてゆくというパターンの

「詩跡」の典型的なケースと言える。また、実際の所在地よりも、その地名によつて喚起されるイメージに関心が集中するという意味では、迦塞詩に登場する地名の数々（「天山」「青海」等）が、これに似たケースとして挙げられよう（日本と言えば「白河の関」などがこれに相当するかもしれない）。その「黄金台」のイメージ化・「詩跡」化に最も重要な働きをしているのが李白であつたことは、極めて象徴的なことと言えるのではないだろうか。

李白と幽燕との関係で今一つ忘れてならないことは、彼が反乱前の安祿山軍の拠点（幽州・薊州一帯）を訪れていることである。これについては、李白自身、後に「経乱離後天恩流夜郎憶旧遊書懷贈江夏韋太守良宰」において「十月到幽州、戈鋌若羅星。君王棄北海、掃地借長鯨。呼吸走百川、燕然可摧傾。心知不得語、却欲棲蓬瀛。彎弧懼天狼、挾矢不敢張。攬涕黃金台、呼天哭昭王。無人貴駿骨、綠耳空騰驤。棄殺舊再生、于今亦奔亡。蹉跎不得意、驅馬還貴鄉。……」と歌っている。ただ、ここで述べられているように、当初から李白が安祿山の謀反の意を事前に察知していたか否かについては、この詩の制作時期が反乱勃発後であるだけに、疑問として残るが、その是非について語ることは本稿の目的ではないので、とりあえず懸案のままにしておく。

むしろ土地論として問題としたい点は、このような李白の発言、あるいは、前述の易水・黄金台（あるいは後述の楽府）も含めた李白の他の多くの幽燕地方に関する言及例から、当然、この地方にも「李白伝承」が生まれ得るであろう、と予想されることである。その予想に適う例として挙げられるのが、以下に挙げる独楽寺伝承である。

『中国名勝詞典』⁽¹²⁾によれば、独楽寺は唐代の創建。別名大仏寺。現在の天津市薊県城西門内にある。名称の由来は、一説に寺の西北に独楽水があるのに因むといい、一説に安祿山がここで起兵した際に、独り楽しむことを思い、民と同じく楽しむうとはしなかったのに因むという。現存する山門と観音閣は遼の統和二（九八四）年の重建、特に観音閣は現存最古の木造高層樓閣（高さ二十三メートル、中に十六メートルもの巨大な観音立像が納められている）として貴重（以上要旨）。

現在、第一批全国重点文物保护单位に指定されている。「李白伝承」のあるのは、この観音閣に掛けられた「観音之閣」の扁額である。現在この扁額の「閣」字の下には、小さく「太白」の文字が刻まれているが、この扁額の四字こそ李白の筆であるというわけである。

この伝承は清代にかなり流布したようで、文献的には次のような記述がある。

(1)【独楽寺二首】〔寺有李太白書「観音之閣」四字、及元蒙哥帝赤所立「賢牧碑」…〕、其二「双林尋独楽、攬轡薊門過。殿閣諸天迴、登臨往蹟多。署書共太白、遺碣有蒙哥。坐聽晨鐘響、将余念薛羅。」（清・宋荦『綿津山人詩集』卷一〇、『李資彙』P. 655及び『王琦本』卷三六「外記」。ただし『王琦本』は『西陂類稿』を出処とする）

(2)吳天章（雲）説、薊州独楽寺観音閣、凡三層、其額乃李太白書。…（清・王士禎『居易録』卷一、『李資彙』P. 664及び『王琦本』卷三六「外記」）

(3)独楽寺、在薊州城西門内、有唐李太白書「観音之閣」扁。本朝高宗純皇帝經臨停蹕、屢有御製詩。（『大清一統志』卷九「順天府」）

(4)【過薊州登独楽寺閣観太白題扁字】翠柏高槐古意多、眼明飛閣極嵯峨。観碑過客今無幾、題扁仙人可奈何。巖句有時編杜集、雪堂何必定東坡。逍遙樓字殊平鈍、俗手鈎摹恐易訛。（清・翁同龢『瓶廬詩稿』卷三、『李資彙』P. 1258）

この伝承も、李白の筆跡に関わる伝承であり、また、おそらくは安祿山という著名人との絡みで生まれたものであろう

と推測される点など、すでに見てきた恒山の「壯観」碑伝承や郭子儀救済伝承と様々な点で類似する。また、事実でないことがほとんど明白であるという点も、共通している（李白は幽州を訪れた形跡はあるが薊州は不明、現在の観音閣は李白以後に建設、扁額伝承は清代以前に見えない——等々）。しかし、これらの伝承すべてに通底しているものを考えてみた場合、伝承を創作し継承していった多くの人々の意識の中に、実態としては李白と縁の薄い河北・河東の地にも、何らかの李白を偲ぶよすがが欲しいといったパトス（情熱）や、他の地区にも多くの遺跡を残している李白なのだから、この地にも多少のモニメントが存在して不思議ではないといった通念等が、伝承成立以前から、事前に存在していたと考えられるのである。それらの意識が、李白の作風や人物像にいかにもふさわしいと思われる土地を介して、実体化したのが、これら「李白伝承」ではないだろうか。独楽寺に関して言えば、①旅好き、名勝古跡好きの李白であるからには、このような北辺の地の寺でも訪れて不思議ではない、②郭子儀の才を見出したように人物鑑定・事態予見の能力に優れた李白が、安祿山の謀反の意を見抜いた場所は、古くから安祿山軍駐屯の地として知られるこの寺（ただしこれも推測の域を出ない）であつても不思議ではない、③雄大な山水・建造物を目にすればすぐさま筆を執る李白であるからには、この薊州の誇る一大建築物観音閣を目にしたならば必ずや一筆揮つたにちがいない、といった予測・期待が、この扁額伝承を生み出したのであろう。この伝承もまた、実像としての李白を出発点としながら、人々の意識の中にある李白像が拡大されてゆき、結果として、今日の豊かな李白イメージを形成する一要素となつた例と考えることができるであろう。

六、河北・河東の地と李白樂府体詩

第二節の〈表〉を概観して気付くことは、李白が河北・河東の地に触れている作品に樂府題のものが非常に多いという点である。全七十六首中二十四首、全体のほぼ三分の一を占めている（一方、歌行・歌吟系のものがわずかに一首にすぎ

ない——しかもその一首は「山鷓鴣詞」で、手法的にかなり樂府的な傾向が強い、ということも注意されてよいであろう。これをどう解釈するかという点は、後述することにして、とりあえずその典型的、代表的な作例を二首ほど挙げておくことにしたい。

北風行

燭龍棲寒門、光耀猶旦開。

日月照之何不及此、惟有北風号怒天上来。

燕山雪花大如席、片片吹落軒轅台。

幽州思婦十二月、停歌罷笑双蛾摧。

倚門望行人、念君長城苦寒良可哀。

別時提劍救边去、遺此虎文金鞞鞬。

中有一双白羽箭、蜘蛛結網生塵埃。

箭空在、人今戰死不復回。

不忍見此物、焚之已成灰。

黄河捧土尚可塞、北風雨雪恨難栽。

この詩は、唐詩に顯著な边塞詩と閨怨詩の融合した作品の代表的作例として、また「燕山雪花大如席、片片吹落軒轅台」「黄河捧土尚可塞、北風雨雪恨難栽」等の句は、李白の誇張表現の代表例、あるいは北辺の厳しい風土を集約的に表現した名句として、非常によく知られている作品である。河北・河東の地の雰囲氣をみごとに描き出しており、李白のこの地

を舞台とした作品の中でも、屈指の出来栄えと言えよう。また、

北上行

北上何所苦、北上緣太行。
磴道盤且峻、巖巖凌穹蒼。
馬足蹶側石、車輪摧高岡。
沙塵接幽州、烽火連朔方。
殺氣毒劍戟、嚴風裂衣裳。
奔鯨夾黃河、鑿齒屯洛陽。
前行無婦日、返顧思旧鄉。
慘慼冰雪裏、悲号絕中腸。
尺布不掩體、皮膚劇枯桑。
汲水澗谷阻、採薪隴坂長。
猛虎又掉尾、磨牙皓秋霜。
草木不可餐、飢飲零露漿。
嘆此北上苦、停驂為之傷。
何日王道平、開顏覩天光。

この作品も北辺に出兵した兵士の苦しみを描いた辺塞詩の傑作。寒冷な氣候、険しい地勢といった北方のムードが巧み

に表現されており、また、その迫力は「蜀道難」に近いものがある。「北上太行山、艱哉何巍巍。羊腸坂詰屈、車輪為之摧。……」に始まる曹操「苦寒行」の伝統をみごとに継承発展させていると言えよう（曹操の「苦寒行」が「我心何怫鬱」と一人称的に語るのに対して、李白は三人称的手法によって多くの士卒たちの思いを、より普遍化して代弁していることにも注意したい）。

この「北風行」「北上行」二作の成功は、李白の豪放で力強い詩風が（もちろんこれだけが李白の個性のすべてではないが）、北方の厳しい風土の描写に適していたことの証明ともなろう。

漢代以来の伝統樂府において、河北・河東地区を歌うものとしては、「苦寒行」「燕歌行」「出自薊北門行」「邯鄲少年行」「幽州胡馬客行」「幽州馬客吟」といった歌辭が容易に思い付く（テーマとしては辺塞、行軍、遊俠、別離、思婦、美妓等が中心になることが多いようである。厳しさ・苛酷さ・勇ましさとといった感覚がイメージとして強い。その点、ソフトな雰囲気のものが多い江南系の樂府とは明確に趣きを異にしている）。李白は、それらの伝統を自らの樂府の中に積極的に取り込み生かすことによって、この地方の特色をみごとに描き出している。

征戰をテーマとしたものとしては、上掲の「北風行」「北上行」がある他、「出自薊北門行」では中国の北辺・西辺に戦う兵士らの苦しみと功名への願望を歌い、「幽州胡馬客行」では匈奴の脅威とそれに苦戦する兵士たちの状況を描き、「戰場南」では異民族との攻防で辺境の「草莽」の中に死んでいく「士卒」らの悲哀と黠武の虚しさを訴え、「千里思」では北辺に戦う兵士の望郷の念を歌い、「閩山月」では出征兵士と彼らの帰還を待つ女たちの悲しみを描く。いずれもこの地の陰惨な風景を詩に効果的に生かしている（北辺と西辺を区別していないものが多いが、これは辺塞詩の伝統）。また遊俠をテーマとしたものとしては、「結襪子」では高漸離、「結客少年場行」では燕丹・荆軻・秦舞陽ら、「少年行、其一」（前掲）では燕丹・高漸離・荆軻・并州児ら、「俠客行」では「趙客」を通して、燕趙の義俠を重んずる風潮を賛美する。また、燕趙の地の女性の美しさやその悲哀を歌ったものとしては「邯鄲才人嫁為厮養卒婦」などがある。あるいは、

「鳴雁行」のように、全篇雁を擬人化し、燕山から雁門関を越え、南方に旅する雁の孤独と悲哀を描くといった、一風変わった作例もある。

また、一首全体とはいかないまでも、この地の風土・風俗を取り上げて、部分的に詩のテーマを盛り上げ引立てているケースも多々見受けられる。例えば、「行路難、其一」では「欲渡黃河氷塞川、將登太行雪滿山」と、人生の艱難を「黃河」「太行」に暗示させ、「行路難、其二」では「昭王白骨繁蔓草、誰人更掃黃金台」と、人材を登用する明君の不在を昭王の故事に託し、「公無渡河」では「黃河、西來決崑崙、咆哮萬里觸龍門」と、黃河渡河の恐ろしさを描き、「空城燕」では「恥涉太行險」と、険しい太行山を越えられぬ燕の悲哀を描いている。

李白の河北・河東地区を歌う用例に、なぜ樂府体のものが多いのか（同時に、一方で歌行体のものが少ないのか）。その謎を解くにあたって、まず樂府體詩そのものの特色について検討してみ必要がある。その際、特に考慮すべき点は、一つには、樂府の多くはもとと中国各地に伝わる「土地歌」であったこと、二つには、「三人稱的手法」¹³を取るのが一般的であるという特質である。

まず前者について触れると、そもそも樂府の多くが、もとと中国各地に根ざした「土地歌」に來源をもつということは、おのずからその各々の樂府が、多少とも、その土地々々の土地柄・風俗を表現することを宿命付けられているということをも意味する。古來からの樂府題を見ても、土地との關係を切り離せないものは数多くある。「蜀道難」「梁甫吟」「王昭君」「荊州歌」「長干行」「入朝曲」「採蓮曲」「子夜吳歌」「白紵辭」「襄陽曲」「大堤曲」「高句麗」「燕歌行」「出自蜀北門行」「邯鄲少年行」「幽州胡馬客行」等々、まさに枚挙にいとまがない。李白も樂府の大成者としての名に恥じず、多くの「土地歌」的な樂府を残していることは周知の通りである。「蜀道難」¹⁴「子夜吳歌四首」「長干行」などはその代表的な例と言えよう。換言すれば、李白の生來的な土地への強い関心は、樂府の作品群にも及んでいると言ってもよい。また李白の場合、総じて、樂府作品にも地名を多数詠み込む傾向が強く、例えば、次の「發白馬」などは、その極端な例である。

発白馬

將軍發白馬、旌節渡黃河、

簫鼓聒川岳、滄溟湧濤波、

武安有震瓦、易水無寒歌、

鉄騎若雪山、飲流涸淳沱、

揚兵獵月窟、軋戰略朝那、

倚劍登燕然、迎烽列嵯峨、

蕭条萬里外、耕作五原多、

一掃清大漠、包虎賁金戈、

この作品などは「白馬（津）」「黃河」「武安」「易水」「雪山」「淳沱」「月窟」「朝那」「燕然」「五原」と、わずか十六句中十例もの地名を詠み込んでゐる。明の陳懋仁（『藕居士詩話』卷下）をして「太白『發白馬』一篇、十六句用地名者十、不但『峨眉山』『月半輪秋』之四而已。大要負大力者揮役萬有、不為俗拘、非細胆小才所得庶幾也。」と驚かせたのも道理である。もともと土地に対する関心が強く、また樂府を得意とした李白が、豊富に存在する河北・河東にゆかりの深い樂府題を見逃すはずはない——これが、この地の地名が李白の樂府にしばしば登場する一因と考えられよう。

次に第二点、即ち樂府の多くが、「三人称的手法」によつて語られる、あるいは「一人称」であつてもその作中の「我」は必ずしも作者自身でない（例えば出征兵士や、夫の帰還を待つ妻の一人称など）、換言すれば、作者と作中人物の間には一定の距離があり、描く対象も必ずしも作者の実体験に基づく必要はない、という傾向をもつという点を考えてみたい。李白によつて、河北・河東の地は、やはり疎遠な地である。生活基盤のあつた土地でもなく、また滞在期間も短い。実

体験に基づく鮮明かつ詳細な地理感覚は、定住者や長期滞在者のようには養えない。しかし、彼としては、このような条件の下にあつても、土地を描きたいという、生来的とも言ふべき欲求は押さえられない——このような状況を設定してみた場合、土地感覚に疎いというハンデを克服しつつ、同時に土地描写への欲求を満たすには、おそらく楽府というジャンルが最も適切であろうと考えられるのである。

つまり、やや消極的な言い方をすれば、楽府の場合、第三者として語ればよい以上、必ずしも作者の実体験に基づく必要はなく、また土地イメージにしても、ある程度その伝来の古辞によつて固定されており、それを受け継ぐ形にすれば、土地勘に関するハンデもかなりの程度克服できる。しかも、見方を変えれば、これはかなり積極的な方向に発想を転化することも可能である。即ち、楽府というジャンルは、個人的な体験による拘束や限界を超克し、自由な発想で、ほしきままに空想を広げていくことが可能なジャンルとも言えるのである。

例えば李白の楽府の傑作「蜀道難」を考えてみても、彼自身、蜀の栈道を越えて漢中なり秦嶺に足を運んだ経験はないにもかかわらず（あるいは、それゆえに）、彼の奔放自在な想像力がいかんなく発揮され、優れた土地文学の代表的作例となり得ている。上掲の「北上行」「北風行」「発白馬」など、河北・河東を歌う多くの楽府詩も同様である。おそらく、彼の土地をテーマとする楽府作品に成功例が多いのも偶然ではない。実体験を踏まえていたとしても、一端それを切り離し、自由な発想で伝統的土地イメージを再構成してみることが楽府は可能なのである。

以上の二点が、この地を歌う作品に楽府体詩が多い理由として挙げられるのであるが、これは同時に、なにゆえ歌行体詩が少ないのかという疑問にも、ある程度答えることができるように思われる。つまり、一つには、河北・河東の地に関する楽府題はすでに豊富に存在するので、作詩の際にはそれを利用すればよいのであつて、それゆえに新たに同じ歌辞系のジャンルに属する歌行体詩を制作する必要があまり感じられなかった、今一つには、彼自身、この地に対して比較的疎遠であるがゆえに、実体験に基づく一人称の発想で書かれる傾向にある歌行体詩は、意識的にも無意識的にも敬遠され

がちになった、といった要因が考え得るのである。

いずれにせよ、彼の豊かな想像力によつて描かれた、これら河北・河東地区に関する楽府体詩は、後世、この地域の詩的イメージを語る上で不可欠の存在となったことは確かである。

七、結語

以上、序論で述べた(1)～(9)にわたる李白と河北・河東地区との関係における特記事項を、主として地域別に概観してみた。李白は、かりにその地が自分にとつて疎遠な地であろうと、彼なりに可能なかぎりその地を印象的に描き出そうと鋭意努力していたようである。その意味で、「自広平乗醉走馬六十里至邯鄲登城樓覽古書懷」「太原早秋」「憶旧遊寄譙郡元參軍」「古風、其十五」「少年行、其一」「北風行」「北上行」といった諸作は、詩的土地論を語る上で、重要な作品群と言えるであろう。また、詩人と土地との相性といった観点から見ても、彼の豪放壮大な詩風（むろんこれが彼の詩風の全てではないが）は、この地の峻烈で険しい山河、北風吹きすさぶ厳しい風土を語るにふさわしく、あるいは、美女を愛し侠客を愛し、一発逆転的な立功に憧れ、また時に「懷才不遇」を激しく嘆く彼の気性は、この地の風俗にこそ似つかわしい。恒山における「壯觀」碑伝承と太白祠、太原における晋祠太白祠と李郭互救伝承、薊鼎の独樂寺觀音閣伝承等、この地に残る数々の李白伝承・李白遺跡は、これら李白の作品・詩風・気性が、当地の多くの文人・民衆たちの氣風に適い、彼らの共感を呼んだがゆえに、受け入れられ継承されていったものではあるまいか。その意味で、これらの伝承は、李白の実像を語る歴史的・事実ではないが、李白という詩人が確かに目指そうとしていた、いわば一つの心的・事実としての方向性を、着実に受け継いだものと見做すことができよう。今日の豊かな李白イメージを語る上で決して無視はできないのである。

〔注〕

- (1) 巴蜀書社、一九九〇年。
- (2) 人民文学出版社、一九五八年。
- (3) 詳細は拙論「李白における武漢の意義」、『詩的古跡』の生成をめぐる（中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第十一集、一九九二年）を参照。
- (4) 美之美社、一九八三年。
- (5) 郁賢皓主編、江西教育出版社、一九九五年。
- (6) 中国戲劇出版社、一九九六年。
- (7) 于石・王光漢・徐成志編、上海辭書出版社、一九八五年。
- (8) 山西人民出版社、一九八七年。
- (9) 山東美術出版社、一九八四年。
- (10) 中華書局、一九九四年。
- (11) 重慶出版社、一九九四年。
- (12) 第二版を参照。上海辭書出版社、一九八九年。
- (13) 楽府体詩の「視点の三人称化・場面の客体化」といった表現機能については松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）所収「楽府・新楽府・歌行論」表現機能の異同を中心に」を参照。
- (14) 「蜀道難」の「土地歌」的な側面については拙論「李白における蜀地方の意義」、『詩跡』論からの再検討」（愛知淑徳大学国語国文」第二二号、一九九八年）に詳述した。
- (15) 歌行体の「一人称」的手法については、注(13)所掲の松浦論文及び松原朗「盛唐期における歌行の展開」李白の一人称的歌行を中心にして」（中国詩文研究会編『中国詩文論叢』第三集、一九八四年）を参照。李白が「土地歌」としての歌行体を数多く残しており、それが楽府体詩と相補的関係にある（旧来の楽府題にない土地を歌う場合に歌行体をもちいる傾向がある）ことについては拙論「李白における安陸・南陽・襄陽の意義」土地讃歌の手法をめぐる」（愛知淑徳大学現代社会学部論集」第四集、一九九九年）を参照。